

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370529

研究課題名(和文) 発話機能を中軸とする日本語配慮表現データベースの構築

研究課題名(英文) The Construction of the Database of Japanese Considerate Expressions in the axis of Speech Function

研究代表者

山岡 政紀 (Yamaoka, Masaki)

創価大学・文学部・教授

研究者番号：80220234

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：第一に配慮表現とは、文脈依存的なポライトネス現象が文脈ごと慣習化した結果、特定の語彙や成句に固着的に見られるようになった表現群として再定義した。それを基準に選定した配慮表現の語彙・表現群125種について、語彙、分類、コーパスから収集した文脈付き用例、文脈上のポライトネス機能を記述し、データベースに集積した。

その際、データベースの構造にも関わる形式分類6種「副詞、副詞句、形容詞・形容詞句、接尾語・補助動詞、文末表現、慣用文」、機能分類7種「利益表現、負担表現、緩和表現、賞賛表現、謙遜表現、賛同表現、共感表現」を導入し、すべての語彙をこれらのいずれかに分類することに成功した。

研究成果の概要(英文)：Firstly, we redefine considerate expressions into vocabulary in which politeness phenomenon are conventionalized wholly with context. As the basis on the criteria, we have integrated considerate expressions 125 vocabulary with word or phrase, classification, utterance sample with context from corpus, and politeness function on the context.

In the process, we make a decision to the two classifications. The former is formal classification 6 groups "adverbs, adverb phrases, adjectives and adjective phrases, suffixes and auxiliary verbs, modalities, and idiomatic sentences." The latter is functional classification 7 groups "benefit expressions, cost expressions, relief expressions, approbation expressions, modesty expressions, agreement expressions, and sympathy expressions." We successfully classify all 125 vocabulary into these any groups.

研究分野：日本語学、語用論、言語哲学

キーワード：配慮表現 ポライトネス 語用論 発話機能 慣習化 文脈依存 緩和表現 共感表現

1. 研究開始当初の背景

(1)1980年代に Leech(1983)や Brown & Levinson (1987)が提唱した「ポライトネス理論」は1990年代には日本でも知られるところとなった。これを受けて、日本語研究者が指摘した具体的なポライトネス現象としては、特定の文脈においてポライトネス機能を有する特徴をもった語や成句を「配慮表現」として記述するものであった。

(2)日本語教育学会の学会誌『日本語教育』で、キーワードに「配慮」を含む論文は2000年以前にわずか2件だったが、2001年から2012年までの間に6件が採択・掲載された。研究書としても、彭飛(2004)、国立国語研究所(2006)、研究代表者・研究分担者の共著による山岡紀・牧原功・小野正樹(2010)(明治書院)、三宅和子(2011)等が出版されるなど、配慮表現に対する関心は高まってきていた。

(3)しかしながら、隣接カテゴリーである「敬語表現」が有限の語彙(述語形態を含む。以下、同じ)を体系的に使い分けるため全貌が把握しやすいのに対し、「配慮表現」は非常に多様な語彙が、それぞれの文脈・発話状況に応じて用いられるため多岐にわたり、当時は個々の配慮表現の機能や用法が指摘されるに留まり、配慮表現全体に対する統一的分析や、該当語彙のリストアップや分類などはなされていなかった。

2. 研究の目的

(1)現代日本語には配慮表現(=他者との対人関係をなるべく良好に維持することに配慮して用いられる表現)が数多く存在するが、その全貌を把握するため、本研究では、日本語において配慮表現と認定可能な語彙をできるだけ多くリストアップし、その用例をコーパスから拾い上げ、当該表現の配慮機能を記述する。そして、それらの情報を集積した日本語配慮表現データベースを構築する。

(2)具体的には、《依頼》に対する《断り》における(A)「その金額はちょっと無理かと...」の「ちょっと」や相手を《非難》する際の(B)「君は試合に勝ったかもしれないが、実力はまだまだだよ」の「かもしれない」のように、特定の文脈において当該語彙の原義とは異なる意味で使用され、専ら対人配慮の機能を果たす表現群を収集する。

3. 研究の方法

(1)現代日本語において配慮表現と見なし得る語彙をできるだけ多くリストアップする。ただし、当該語彙が配慮表現に該当するのかどうかを判断するには、コーパスの用例を多く収集して帰納的に検証する必要があるため、語彙リストアップと用例収集とは同時並行で行わなければならない。

(2)抽出された各配慮表現の用例をコーパスから検索して収集する。ここで大事なことは文脈情報がわかるように前後文脈を含めて収集することである。ここでは、研究代表者が前研究課題で作成した発話機能付き会話コーパスや既存の各種公開コーパスを使用する。

(3)各配慮表現が使用される発話を取り巻く語用論的な発話状況(発話者の対人関係、発話内容に関連する了解事項、社会通念など)を記述する。そのためには、当該語彙を含む発話の発話機能(例:《依頼》、《主張》、《反論》)や、先行発話の発話機能を記述することが重要である。例えば、(A)「一億円融資していただきたいのですが」「その金額はちょっと無理かと.....」という用例の場合、先行発話の発話機能は《依頼》で、当該発話の発話機能は《断り》である。ここで発話機能については、研究代表者が山岡(2008)において、発話の目的や発話を取り巻く語用論的条件によって厳密に定義する理論を提唱しているが、そこでは当該発話が聴者に対して対人的な均衡状態を脅かすものであることが論じられていて有効であり、本研究においても記述の中軸として活用する。

(4)配慮表現の各語彙が各用例から一般化されることの配慮機能(=対人関係にもたらす効果)を検証して記述する。例えば、(A)の「ちょっと」は《断り》において相手の期待に添えないことへの気まずい思いを緩和する機能を有する。これは相手のネガティブ・フェイスと自分のポジティブ・フェイスを脅かすことを補償するポライトネスの機能と説明することができる。

(5)海外研究協力者等の協力も得ながら、英語、韓国語、中国語など、主要外国語との対訳を作成する。

(6)上記の(1)~(5)の成果を集積したデータベースを作成して公開し、研究者、日本語教育研究者の便宜に供する。

4. 研究成果

(1)配慮表現を語彙としてリストアップしていくことを目的とする本研究においては、議論の過程で配慮表現とポライトネスの関係を整理する必要に迫られた。なぜなら、ポライトネスは本来、文脈依存的で流動的な言語現象であって特定の言語形式が担うものではなく、リストアップできるものではなかったからである。

これに対して本研究では、次のような説明を与えた。配慮表現とは、もともとフェイスに対するポライトネスの意識によって臨時に動機づけられた(語彙の)用法であったものが、一定の文脈で同じ語彙が同じポライトネス機能を帯びて使用されることが繰り返

されて次第に定型化すると、そのポライトネス機能が当該語彙の新たな派生的意味として定着する。これが配慮表現である。

以上の議論をもとに配慮表現の定義を見直した。即ち、Leech (1983) における慣習化 (conventionalization) の概念を用いて「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現」と再定義した。これは大きな理論的成果であると考えられる。

(2) データの収集と並行して分類の整理を行い、最終的に形式分類 6 種と機能分類 7 種を決定した。これはデータベースの構造に関わるという意味でも必要性が高いが、同時に配慮表現全体を俯瞰する理論的要請としても重要である。

形式分類は「副詞、副詞句、形容詞・形容詞句、接尾語・補助動詞、文末表現、慣用文」の 6 種である。単独の副詞と副詞句とは慣習化による固着性の表れ方が異なる点にも着目し別分類とした。副詞句の場合は成句形式の固着化という形式上の慣習化も同時に発生する。次に、前置き表現は「すみませんが」「よろしければ」のように発話全体の前置きとして用いられるものもあれば「ご多忙のところ」のように情態副詞として動詞を直接修飾するものもあるため、すべて副詞句に含めることにした。さらに慣用文というグループを新設した。これは文の構成要素というよりも独立した一つの文全体が配慮表現として慣習化したものである。

機能分類は「利益表現、負担表現、緩和表現、賞賛表現、謙遜表現、賛同表現、共感表現」の 7 種である。これらは Leech (1983) のポライトネスの原理の下位原則がそれぞれ慣習化したものとして説明が可能である。配慮表現の語彙の代表例をこの機能分類に当てはめて列挙すると以下ようになる。

負担表現 (他者負担大) 「ご多忙のところ、わざわざ、お手数ですが、ご面倒ですが」

負担表現 (自己負担小) 「喜んで、ぜんぜん、大丈夫、ついでに」

利益表現 (他者利益小) 「つまらないものですが、ご笑納ください、何もありませんが」

利益表現 (自己利益大) 「おかげさまで、~れば幸いです、ぜひ」

謙遜表現 (自賛抑制) 「まだまだ、そこそこ、自慢じゃないけど、月並みですが」

謙遜表現 (自己非難) 「出来の悪い、僭越ながら、若輩者、不束者」

賞賛表現 「さすが、すごい、お見事、恐れ多くも、もったいないくも」

緩和表現 (非難抑制) 「かもしれない、どちらかと言えば、ちょっと、ただ」

緩和表現 (不一致回避) 「~のほう、~的には、とか」

賛同表現 「なるほど、ごもっとも、たしかに」

共感表現 「大変ですね、よかったですね、おつかれさま、それな、ですよー、ほんとそれ」

(3) 上述の(1)定義を基準として収集した語彙を(2)の分類に帰属させ、語彙、分類、コーパスから収集した文脈付き用例、文脈上のポライトネス機能の情報群を付加してデータベースに集積した配慮表現の語彙・表現群は合計 125 種に上る。機能分類での内訳は「利益表現 16、負担表現 22、緩和表現 46、賞賛表現 10、謙遜表現 11、賛同表現 9、共感表現 11」である。このように、与えられた 4 年間の研究期間としては大きな成果を挙げることができたと考えている。

実際にはもっと多くの配慮表現が存在するため、今後もこの作業を継続していく必要がある。その意味ではこのデータベースは未完成であるとの認識からデータベースの公開は保留して作業を継続していきたい。

個々の語彙についての詳細な各論分析もいくつか手がけた。文末表現「かもしれない」の配慮表現用法の詳細記述は下記の論文として発表した。そのほかにも「たしかに」や「一応」など、個々に分析を施して論文として発表可能な状態でデータベースに入力してある語彙もある。

このように配慮表現データベースの作業を継続しながら、並行して個々の配慮表現の分析作業も継続していきたいと考えている。

<参考文献>

- 国立国語研究所(2006)『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版
彭飛(2004)『日本語の「配慮表現」に関する研究』明治書院
三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』ひつじ書房
山岡(2008)『発話機能論』(くろしお出版)
山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現』明治書院
Brown & Levinson (1987) *Politeness*, Cambridge University Press
Leech (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

山岡政紀、文機能とアスペクトの相関をめぐり一考察 動詞テイル形の解釈を中心に、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第 3 号、2014、1-8

山岡政紀、文機能とアスペクトの相関をめぐり一考察 テイル形の人称制限解除機能を中心に、日本語日文学、査読無、第 24 号、2014、27-40

山岡政紀、現代日本語配慮表現の記述方法の確立に向けて 配慮表現データベース構築の基礎論として、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第4号、2015、57-63

山岡政紀、李奇楠、配慮表現の日中対照と日本語教育、異文化理解と日本語教育（趙華敏編、高等教育出版社）査読無、2015、216-231

山岡政紀、慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義、日本語用論学会第17回大会発表論文集、査読有、第10号（2014）、2015、315-318

山岡政紀、配慮表現の慣習化と原義の喪失をめぐる一考察、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第5号、2016、1-9

山岡政紀、「カモシレナイ」における可能性判断と対人配慮、言語の主観性認知とポライトネスの接点（小野正樹・李奇楠編、くろしお出版）査読無、2016、133-150

山岡政紀、配慮表現の慣習化をめぐる一考察 メタファーとのアナロジーをもとに、日本語日本文学、査読無、第27号、2017、27-38

〔学会発表〕（計16件）

山岡政紀、日本語配慮表現データベースの構築に向けて、日本語コミュニケーション研究会研究合宿、2013.8.27、山中荘（山梨県山中湖村）

山岡政紀、現代日本語配慮表現の記述方法の確立に向けて 配慮表現データベース構築の基礎論として、第4回日本語コミュニケーション研究会、2014.2.21、筑波大学（茨城県つくば市）

YAMAOKA Masaki、現代日本語配慮表現の記述方法の確立に向けて 配慮表現データベース構築の基礎論として、Eighth International Conference on Practical Linguistics of Japanese, 2014.3.22, National Institute for Japanese Language and Linguistics, (Tachikawa, Tokyo, Japan)

YAMAOKA Masaki、〔基調報告〕配慮表現研究の意義、〔報告〕配慮表現データベースの構築、International Conference of Japanese Language Education, 2014.7.11, University of Technology, Sydney (Australia)

山岡政紀、〔講演〕配慮表現に満ちた新しい日本語、創価大学夏季大学講座、2014.8.29、創価大学（東京都八王子市）

山岡政紀、慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義、日本語用論学会2014年度年次大会、2014.11.29、京都ノートルダム女子大学（京都市左京区）

山岡政紀、「カモシレナイ」における客観性と主観性、第5回日本語コミュニケーション研究会、2015.1.23、創価大学（東京都八王子市）

山岡政紀、配慮表現の定義と慣習化、日本語コミュニケーション研究会研究合宿、2015.9.7、国家公務員共済組合連合会鎌倉保養所（神奈川県鎌倉市）

山岡政紀、慣習化した副詞句に見られる配慮表現をめぐる、第6回日本語コミュニケーション研究会、2016.1.30、筑波大学（茨城県つくば市）

YAMAOKA Masaki (LI Qi-nan), 「批判」の発話について、Ninth International Conference on Practical Linguistics of Japanese, San Francisco State University, 2016.6.4, San Francisco, (U.S.A)

YAMAOKA Masaki (ONO Masaki), 日本語・英語・中国語の語彙“丁寧”に関する分析、Ninth International Conference on Practical Linguistics of Japanese, 2016.6.5, San Francisco State University, San Francisco, (U.S.A)

YAMAOKA Masaki, LI Qi-nan, 配慮表現の慣習化と原義の喪失、International Conference of Japanese Language Teaching 2016, 2016.9.10, Bali Nusa Dua Convention Center Nusa Dua, (Indonesia)

YAMAOKA Masaki, (MAKIHARA Tsutomu, LI Qi-nan), 配慮表現から見た日本語の同一語句の繰り返し発話について、International Conference of Japanese Language Teaching 2016, 2016.9.10, Bali Nusa Dua Convention Center, Nusa Dua (Indonesia)

山岡政紀、日本語配慮表現データベース構築の中間報告、第7回日本語コミュニケーション研究会、2016.10.29、筑波大学（茨城県つくば市）

山岡政紀(指定討論者) 共同パネル「日中韓の言語行動の比較から見る日本文化の特質、東アジア日本研究者協議会第1回研究大会、2016.12.1、松島コンベンシア、仁川市(大韓民国)

山岡政紀、日本語配慮表現における慣習化と語彙リストについて、第8回日本語コミュニケーション研究会、2017.3.1、創価大学(東京都八王子市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://home.soka.ac.jp/~myamaoka/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山岡 政紀(YAMAOKA, Masaki)

創価大学・文学部・教授

研究者番号: 80220234

(2) 研究分担者

牧原 功(MAKIHARA, Tsutomu)

群馬大学・国際・教育センター・准教授

研究者番号: 20332562

小野 正樹(ONO, Masaki)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号: 10302340

大塚 望(OTSUKA, Nozomi)

創価大学・文学部・教授

研究者番号: 80334639

山下 由美子(YAMASHITA, Yumiko)

創価大学・学士課程教育機構・講師

研究者番号: 90635294

斉藤 幸一(SAITO, Koichi)

広島修道大学・学習支援センター・学習アドバイザー

研究者番号: 50649845

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

李 奇楠(LI Qinan)

北京大学・外国語学院・副教授

金 玉任(KIM Ockim)

誠信女子大学・人文科学部・教授

カノックワン・ラオハブラナキット片桐

(Kanokwan Laohaburanakit KATAGIRI)

チュラロンコン大学・文学部・准教授